

國學院大學学術情報リポジトリ

シンポジウム討議記録：平成二十九年度
國學院大學人間開発学会第九回大会
公開シンポジウム
最新のスポーツ科学の知見をどうやって教育現場で
活用するか?：シンポジウム
大学で学ぶべきスポーツ科学

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 龍勇, 窪, 康之, 神事, 努 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001351

〔シンポジウム1 討議記録〕

登壇者

杉本龍勇 (法政大学経済学部経済学科教授)

窪康之 (国立スポーツ科学センター・スポーツ科学部副主任研究員)

司会

神事努 (國學院大學人間開発学部健康体育学科准教授)

神事 今回、トップアスリートということで、話をしてみいました。その中で、データから支援する立場の窪先生と、それを使ったりとか、実際にマネジメントして強化していく杉本先生とは、競技への関わり方、選手、コーチへの関わり方が違うのではないかと思います。

まず、杉本先生にお話をお聞きしたいです。今、窪先生のお話に、データを使って強化していくという話がありました。今度はデータを使う側として、データに関して、いい、悪いとか、こうあったほうがいいんじゃないかというコメントがありましたらお願いします。



杉本 先ほど、窪先生の話の中でもあった部分ですが、データの数字はうそはついていないので、数字の信ぴょう性に対してできることではなくて、どう使うっていうところです。それが良くなるかどうかという、要因、単刀直入に結果にどう

つながるのかというところを説明してもらえると、一番ありがたいと思います。ただ、先ほど言ったように、研究となると非常に困る部分も発生してきます。あくまでも全体像を見ながら、その細かく切った部分がどう貢献するのかという話をしてもらえれば、大変役に立つものになるのですが、ただ、切った部分だけで話をされると、何してたって、という話になっちゃうのではないかなと思います。

神事 選手やコーチにデータを持っていく段階で、全体的な、総合的な話をしてしまうと、少しコーチングの部分に入ってしまうところも実際あると思うのですが、どうですか、窪先生。

窪 僕らにできることとできないことがはっきり分かっている人とはやりやすいです。大体、うまくいくときっていうのは、コーチが、こういうこと知りたいっていうのが常に分かっていて、あるいは、自分では迷ってるって言うっていても、ほとんど答えが出かかってることが多いわけです。なので、あと最後のところでデータが生きたら、そういう感じです。真つさらな人にデータ持っていくって、役に立たないんです。全然、課題意識がなくて、「いろいろ測ってみてください」っていう団体も結構あって、そこは絶対うまくいかないですね。何かしらコーチに、受け皿みたいな感じで準備ができていれば、ある程度、どんなデータでもうまくいっちゃうんです。

神事 受け皿ができてない指導者やコーチ、選手に対しては、何かアプローチしたりとかするんですか。

窪 一つは、割と古くから言われているような技術で、理論上、それは違うんじゃないかなというところを手掛かりにして、「よくこう言われてますけど、データでは違いますよ」とか、「実際にはこうなってますよ」というのを示します。あとは、コーチってすごくディテールを見るんですね。最近だと肩甲骨が寄ってるほうがいいとか、骨盤が前傾していたほうがいいとか。それっていろんないい部分の一部にすぎないんですね。なんでそれがいいんですかって聞くと、「だって、骨盤前傾してたほうが、ハムストリングが緊張して、強く蹴れるでしょう」って言ったりする。そうすると「強く蹴れば何でもいいんですね」って話になるんですね。そういった、上位の課題は何なのか、力学的にどういう課題が達成できているのか、問題の整理みたいなことをやってあげるのが、僕たちの仕事かなと思います。

神事 先ほどの、加速度の話などは、ある程度、理解しないと使えないデータだったりしますが、そこら辺もうまく解釈して持っていくっていうことも必要なわけですね。

先ほど杉本先生からのお話で、選手という切り口があったと思いますが、こういう選手が伸びるんじゃないか、であるとか、こういう選手は伸びないんじゃないかという視点ってありますか。

窪 すごいと思うのは、課題を持って取り組んでいる人ですね。きちんと自分で分析できている人は素晴らしいなと思いますね。

神事 トップアスリートという話で進んでいったのですが、教

育であるとか学校現場に、少しシフトして話をしていきたいなと思います。杉本先生、チームもトップアスリートのような形でマネジメントするのがいいんじゃないかとありました。選手側から、杉本先生の所に来てくれた場合、向こうはもちろん、心を開いた状態で来ることが多いとは思いますが、学校現場だとそうとも限りません。先生も生徒、児童を選ばませんし、逆もまたしかりです。何か、学校現場でのマネジメントで、スポーツとこういうところが違うみたいなことがあれば、お聞かせください。

杉本 基本的に、選べないっていうのは、こういう現場上はあると思うので、そのときに、自分の中で心掛けてるのは、向こうが選んできて、こっちが選べないときには、感情は排除する。物事は何でもそうだと思うのですが、好きとか嫌いっていうことで、物事を見始めると、必ずこじれます。自分の感情を選手とか、あるいは誰でもそうですが、投影しないことを自分のコンセプトとしてやっています。それをしないと、客観性を持ってマネジメントできません。

ここできょうお話したように、理念は、指導者と選手であつたりとか、教師と生徒をつなげていく、非常に大事な素材なので、理念さえちゃんとお互い理解しているかどうかということとを大事にできれば、感情的なところはコントロールできると思います。このチームは何のためにあるのかという理念を、ちゃんと共有することです。それが、最低限の義務だと思うんです。その義務としての理念を、ちゃんと築けるかどうか。意外と、理念をちゃんと持っていないというか、詰めてない組織が多いの

で、毎年、あるいは半年に1回なのか、必ず理念を再確認するとか、理念をもう一回洗い直すとか、確認する、作り直すってというような作業をする。

何となく学校の教育現場だと、強制的にあてがわれてきて、それで時系列的に流れてきますけど、そうではなくて、スタートする、日本でいうならば四月の時点で、この教室はどういう教室なのか、このクラスはどういうクラスなのか、この部はどういう目的を持ったクラブなのかということを、必須の作業としてやるべきだろうというふうに思います。

神事 共有する相手が、未成年かどうかあると思うんですが、そうすると共有する先って、もしかしたら親になる可能性もあるってことでしょうか。

杉本 今、実際に自分が地元の小学校で週に一回、児童クラブやっていますけど、親じゃなくて子どもと共有します。教えている側が偉いんじゃないって、きょうも話したように協働なので、そこにいるメンバーは小学生であろうが大人だろうが、年齢的な、あるいはインテリジェンス的ギャップがあっても、うちのクラブはこういうものをやるんですよ。これをやるために、これとこれは最低限守ってくださいねっていう、人としてやっていけないことを、ちゃんと共有するようにしています。親と共有しても、子どもに伝わるとは限らないですから。小学生とか幼稚園生となる場合は、われわれ大人が、ちゃんと伝わるようなコミュニケーションスキルを身に付けそういう理念を保つために、どうコミュニケーションを取るか、その相手がどうな

のかそれによって、スキルを変える、そういう順番でやるようにはしています。

神事 そういう所で育った児童っていうのは、その先も、先ほどおっしゃったような客観性があるとか、自立しているとか、努力の方法を間違えないとかっていうところにも、結び付いてくるってということですね。

杉本 小学生なので、中学生や高校になってからの追跡はしてないですけど、彼らの態度を見てみると、リスペクトされてると割合感じています。結果的には理念をちゃんと伝える、理念をつくってそれを共有の媒体として、ぶれずに改変していく、修正していくってことを、とにかく徹底するってことができれば、対象が親でなくても関係ないと思います。

神事 先生っていう立場を考えるならば、国立スポーツ科学センターは、研究者がチームに入ってたとか、支援する形で分析を担当する。一方でコーチは、選手をうまくさせるために担当するっていう意味では、いろんな役割を持った人が関わるっていると思うんですが、教員の場合には、一人でそれを賄わないといけないところが難しさだと思うのですが、そこら辺、バランスであるとか、何か注意したほうがいいとか、アドバイスありますか？

窪 杉本先生のお話とかぶると思うんですけど、コーチ一人ですべてできないとき、アスリートの能力でやっていくか、あるい

はサポートしてくれる人がうまく協力してくれるかになるのですが、それはどこ目指してるのかはつきりしてれば、みんながそれに向かって教育したりとか、必要なことを提供してくれると思うんですね。選手も、あるいは教育では子どもたちも、自分はこのことを目標に勉強するためにここにいるということが分かってさえいれば、割とコーチの足りない部分を補って理解したりとか、そういうのにつながるんじゃないかなと思います。基本的には、アスリートは勝つとか、オリンピック出るっていう目標があるので、そんなにぶれないですよ。きちんとこういうところ目指すのだということを示せるかどうか、リーダーには大事なかなと思います。

神事 フロアから、これ聞いてみたいなど、質問はありますか。

山田（國學院大學人間開発学部健康体育学科教授） 窪先生のほうに質問させていただきたいのですが、きょうご提示いただきましたスライドの中に、体操選手が平行棒を正面、側面から撮った映像を見たりだとか、いろんなこと話していたのですが、トップの選手たちは、見た後、何かコーチと、その映像を見てのやりとりというものを、細かく毎回、やっているんでしょうか。

窪 一人でというのは、すごくやります。例えば今、練習中に撮った映像をサーバーに入れて見れる仕組みを作っていて、いろいろな競技の人が使っています。体操の人が一番見るんです。なので、自分がやったものを見るとか、自分がやったことを確認するというのを、一人ではすごくやってるように見え



ます。ただし、コーチと、今のどうだったかということ話をすることはあんまりないですかね。

コーチから話し掛けられない感じですね。選手が聞いてきたら、何かコメントをするけれど、自分から、今どうだったのかって言うコーチが、今の日本体操チームにはいない。そのほうがいいと思ってやっているのでしょうか。

備前（國學院大學人間開発学部健康体育学科准教授） 私杉

本先生と同じ、スポーツマネジメントを専門にしています。ゼミの授業で、ビジネスプランを考えて発表したりする中で、基準として、よく独創性と実現可能性というものを示します。その二つは、両立することが難しいと思うのですが、例えば学生を対象にした場合、実現可能性と独創性という部分で、どちらのほうを重視すればいいのかを、教えていただければと思います。

杉本 スポーツマネジメントの分野でいうと、基本的には経済の理論をしつかり学んでいるかどうかの話をします。独創性、実現性というときには、過去の事例を、かなり踏まえなきゃいけない部分があると思うので、実現性を担保するためには、きちつと理論を学ぶということだと思えます。例えばスポーツビジネスであれば、経済学と経営学の基礎理論は、少なくとも押さえておいて、それを基に、どうクリエーティブな部分を加えていくかということが、その二つを担保することだと思います。

ぜひ、きちつとマクロ経済学、ミクロ経済学の授業はやった

ほうがいいと思います。

備前 今、結構ビジネスで問題になっている、イノベーションという部分で、データは活用するのですが、活用するだけではイノベーションが生まれません。今の学生は結構ありきたりな意見で終わってしまいがちなかなと思っていて、そこをどうすればいいのでしょうか。

杉本 基本的に学生のテーマに対して何も言わないようにします。興味を持ったものに対して、最初からいいか悪いかとか、できる、できないとかじゃなくて、そこはちゃんとしらみつぶしにやって話をしていないと、今のは保守的ですね。クリエーティブな部分って才能だと思います。しかし、全員がクリエーターだったら、世の中ゴチャゴチャになっちゃいますから、そういう意味では、ありきたりの意見が出るのは前提で、その中からほんの一粒でも気の利いたことが出ればいいんじゃないかなと思います。それを集めていくことによって、一つのイノベーションな意見が出てくるのではないのでしょうか。

今の日本の教育では、イノベーションを生み出すような素地は、ほとんどないと思うので、学生のリアクションっていうのは、当たり前だと思えます。実際は、新しいことでもいいから、最初に思い付いたことは、理論に基づいて検証していつて、できるかできないかが分かると、また今よりはイノベーションな意見が出やすくなるのかなと思います。

原（國學院大學人間開発学部健康体育学科教授） コーチと選手が上下関係みたいなのとか、先生と生徒、学生の間にも上下



の感覚があると思いますが、そこを変えていこうとしたら、どんなことがいいでしょうか。

杉本 ドイツにいたときに言われたのは、練習に関しては王様

と奴隷だ。指導者が王様で失敗したときには、指導者が責任を取る。責任の所在が、日本の場合ははっきりしてないというか。例えば部活動でも、「結果を出すぞ」って言ったのに結果が出なくても、生徒が責められるケースは、たくさんあるじゃないですか。まずは、指導者自身が、自分の指導に対してもっと責任を持つことです。その責任というのは、自分のミスを認めることであつたりとかします。

勝ったときに指導者が目立ち、メディアにも取り上げられる国はほとんどないですし、負けたときに選手のせいにするっていう国も、ほとんどないので、まずは指導者自身が、もっと自分の指導内容とかに対して責任を持つ、駄目だったときに腹をくくれるかっていうことじゃないかと思います。そういうところができる、多分、選手も、もっと意見を言ってもいいのではないかと、自分の悩みを言ってもいいのではないかということになるかもしれない。日本の場合は責任を取らない指導者が多いので、そこを改善するのが一番ではないかというふうに思います。

神事 ありがとうございます。ぜひ今後、もう少しスポーツ科学が、世の中を変えていく一つのきっかけになってもらいたいですし、学生はそれを担う人たちなので、ぜひ積極的に何事もやってほしいなと思いました。